

三重県中国ビジネスサポートデスク現地レポート

平成28年10月27日

上海デスク（上海納克名南企業管理諮詢有限公司）

「スポンジ都市」の建設

地球規模で異常気象が叫ばれるなか、中国ではちょっとした豪雨のたびに、日本以上に都市生活インフラが被害を受けています。

中国の都市はゲリラ豪雨にはめっぽう弱い

近年、地球規模の気候変動が大きな問題となっていますが、中国もその例外ではありません。今夏も中西部を中心に大雨による被害が多発しました。中国一の大河長江の流域にある湖北省武漢市近郊では、豪雨により市街地の屋外スタジアムに雨水が流れ込み、まるで「大きなバケツ」のように雨水が溜まった映像がニュースで流れ、話題となりました。また首都北京でも、4年ぶりの豪雨により市内各地で道路の冠水や地下鉄駅への浸水が発生しました。

日本においても、昨年の茨城県の鬼怒川のように、記録的豪雨による河川の決壊や氾濫等が発生しています。一方で、日本の都市部での豪雨は、道路の冠水や鉄道の運行状況の乱れ等の被害をもたらしますが、短時間で解消されています。都市部の排水機能が脆弱な中国では、北京や上海、広州などの大都市でも、短時間の大雨で交通機能がマヒすることが少なくありません。

「スポンジ都市」建設計画

中国都市部の大雨被害について、当地の専門家は、経済発展に伴う市街地の拡大によって、地表のコンクリート面が拡大し雨水が地面に浸透しづらくなったことや、排水施設が不十分なため多少の降水でもすぐに冠水してしまうことを原因として挙げています。そこで中央政府は、昨年10月、雨水を循環利用する「海綿（スポンジ）都市」の建設に向けた指導意見を公布し、モデル都市を選定し、助成金を交付することを決定しました。

中国経済の減速が鮮明になり、公共事業投資により経済を下支えしていく必要があるなかで、高速鉄道や高速道路への投資は一巡した気配があります。今後は、都市交通インフラと共に、都市生活インフラとしての「スポンジ都市建設」が重視されることでしょう。中国の公共工事に外資企業が直接参加することは困難ですが、過去に培った技術・設計・材料などを通して、日本及び日系企業も中国の都市水害対策に一役買うことが可能かもしれません。

中国四千年の歴史に学ぶ

当地の報道によると、市内中心部にある故宮（紫禁城）は、清の時代から雨水が溜まらないよう設計されており、4年前の北京豪雨の際も今回も、全く冠水することはなかったそうです。また、「東洋のヴェニス」として有名な蘇州の旧市街地区も、1911年の中華民国建国以前の時代においては一度も冠水の被害にあったことはありません。都市設計においては、中国四千年の歴史から学ぶことも多くあるようです。